

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01618

研究課題名(和文) 小学校高学年の体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究

研究課題名(英文) A study of the relevance to teacher's verbal interaction during physical education classes in elementary schools

研究代表者

上原 禎弘 (Kamihara, Yoshihiro)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：80552380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校高学年(5・6年)を担当している6名の教師に、同一の課題解決的プログラムによるバスケットボールの授業(オープンスキル教材)を行ってもらい、学習成果(態度得点)を顕著に高めた学級とそうでない学級の逐語記録を品詞により分析し・検討した。その結果、先行研究で示された学習成果(態度得点)を高める教師の言語的相互作用の仕方が確認された。さらに、特徴的な品詞を伴う指導技術を逐語記録から抽出した結果、課題把握場面において「児童の発見内容の紹介」と「ゲーム分析の結果の提示」が、課題解決場面において「ゲームフリーズ」と「言語的合図」がそれぞれ認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、体育授業において学習成果を高める教師の言語的相互作用の適切性である「いつ、どこで、だれに、何を」発言すればよいのかを究明するものである。先行研究において、小学校高学年の走り幅跳び授業を中心としてクローズドスキル教材について、教師の言語的相互作用の仕方、すなわち<体育授業の文法>の存在が明示されてきた。本研究のバスケットボール授業(オープンスキル教材)においても、先行研究と同様に教師の言語的相互作用の仕方を確かめるとともに、具体的な指導技術を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Using basketball lessons as a medium, we examined in teacher's verbal interaction by comparing classes with high scores with those showing low scores. Using Kobayashi's Physical Education Inventory, teacher's attitudes were measured twice for fifth and sixth graders, constituting six classes in various elementary schools. All elements of the teacher's speech and behavior were classified into parts of speech as minimum element sentences. The results obtained were as follows. 1) The method of the verbal interaction of the teacher who raises the learning products (attitude scores) shown by precedence research was checked. 2) As a result of extracting the instruction technology accompanied by a characteristic part of speech from data, in the subject grasp scene, "introduction of a child's contents of discovery" and "presentation of the result of game analysis" were accepted. Furthermore, "game freezing" and "verbal cue" were accepted in the problem-solving scene.

研究分野：体育科教育学

キーワード：小学校高学年 体育授業 学習成果 教師の言語的相互作用 品詞分析 バスケットボール授業

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、体育授業において学習成果を高める教師の言語的相互作用の適切性である「いつ、どこで、だれに、何を」発言すればよいのかを究明するものである。先行研究において、著者らは小学校高学年の走り幅跳び授業を中心としてクローズドスキル教材について、教師の言語的相互作用の仕方、すなわち特徴的な8つの品詞の使い方（＜体育授業の文法＞）の存在を明らかにしてきた。しかしながら、ボール運動等のオープンスキル教材におけるデータ分析が蓄積されておらず、バスケットボール授業（オープンスキル教材）における教師の言語的相互作用の仕方確かめるとともに、具体的な指導技術を明らかにする必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究では小学校高学年（5・6年）を担当している6名の教師に、同一の課題解決的プログラムによるバスケットボールの授業（オープンスキル教材）を行ってもらい、学習成果（態度得点）を顕著に高めた学級とそうでない学級の逐語記録を品詞により分析し、先行研究で示された教師の言語的相互作用の仕方の妥当性を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下に示す2つの研究課題の回答を得ようとした。

バスケットボール（オープンスキル教材）の授業においても教師による特定の8つの品詞の使い方（12種類の品詞）が認められるか。

さらに、それらの品詞の使い方にはどのような特徴があるのか。

### 3. 研究の方法

#### (1)対象とその授業

本研究の対象は、兵庫県下並びに香川県下の3小学校高学年（5・6年）を担当している6名の教師である。それぞれの教師には、同一の課題解決的プログラムによるバスケットボール（計9時間）の授業を展開してもらった。

#### (2)指導プログラム

本研究の対象となった6名の教師に、今回用いた指導プログラムの意図と内容に関するオリエンテーションと具体的な指導方法についての情報を提示した。このプログラムは、児童が自らで課題を形成するための問題設定として「共有課題」を単元経過ごとに設定している。すなわち、共有課題は、「パスをつないでシュートをしよう(2時間)」で、一人でドリブルからのシュートまで持ち込むのではなく、味方にパスをつなぎながらゴールに迫ることをめざす。共有課題は、「ズレをつくってシュートをしよう(3時間)」で、相手をかわすことによってズレをつくりパスをもらうこと、そしてパスを出す側も素早いパスを意識することでシュートにつなげることをめざす。共有課題は、「スペースをうまく使ってシュートをしよう(3時間)」で、ポストマンの役割を導入したコア作戦の練習を取り入れている。そして、ポストマンとのコンビネーションを生かし、全体のスペースをうまく活用しながら素早くシュートへもちこむことをめざす。共有課題は、「ゲーム大会をしよう(1時間)」でこれまでの学習を意識しながらプレーする。

#### (3)児童の授業に対する態度と心情の測定

単元前後における児童の授業に対する愛好的態度を小林(1978)の態度測定法を用いて測定した。単元授業の評価としては、小林(1978)の「よい授業」への到達度調査を毎授業後に実施し、各質問項目に対する好意的反応を量的並びに質的の両面から分析した。

#### (4)授業記録の収集

バスケットボールの指導プログラムから、各単元過程の中心である2・4・7時間目の授業をICレコーダーおよびビデオを用いて収録し、教師の発言内容の逐語記録（準備運動と整理運動は除く）を作成した。

#### (5)品詞分析の方法

上原・梅野(2000)が開発した品詞分析は、名詞、動詞といった品詞の使用頻度の違いを比較・検討するものであるが、彼らがこれまでの教師の「相互作用」研究の結果(梅野・辻野, 1991, 梅野ら, 1997, 高橋ら, 1989, 1991, 岡沢ら, 1990)に基づいて、体育授業における教師の作用言語を文法上からもまた語彙の意味の上からも言葉の最小単位である品詞（IW品詞：Interactional Words）を基軸に検討している。

### 4. 研究成果

(1) 単元授業における上位群と下位群の品詞総数を比較した結果、上位群は約3,000語、下位群は約1,700語であり、上位群の方が下位群に比して有意に使用頻度の多い結果が認められた。

(2) 単元授業における上位群と下位群のIW品詞の使用頻度を比較した結果、助詞（文末終

助詞)と名詞(身体部位)を除く残り10種類の品詞において、上位群の方が下位群に比して有意に使用頻度の多い結果が認められた。

(3) 各単元経過における上位群と下位群のIW品詞の使用頻度を比較した結果、各単元過程で有意差の認められた品詞が異なる結果が示された。

(4) 上記(2)と(3)で認められた品詞には、児童の多様な運動の感じを発生させるとともに、それを深化させる働きのあることが児童の心情調査の記述内容から確かめられた。

(5) 一単位授業における課題把握場面と課題解決場面における上位群と下位群のIW品詞の使用頻度を比較した結果、双方の場面では名詞(身体部位)、名詞(空間)、名詞(時間)、代名詞(人称)、形容詞(対比)、副詞(疑問・強調・仮定)、副詞(程度)の7種類の品詞において、課題把握場面では名詞(動作)と感動詞(肯定的)の2種類の品詞において、課題解決場面では名詞(人名)、形容詞(肯定的)助詞(文末終助詞)の3種類の品詞において、それぞれ上位群の方が下位群に比して使用頻度の多い結果であった。

(6) 上記(5)で認められた品詞を伴う指導技術を逐語記録から抽出した結果、課題把握場面において「児童の発見内容の紹介」と「ゲーム分析の結果の提示」が、課題解決場面において「ゲームフリーズ」と「言語的合図」がそれぞれ認められた。

(7) バスケットボール(オープンスキル教材)の授業においても学習成果(態度得点)を高める教師の言語的相互作用の仕方が確認された。

#### <引用文献>

小林篤,大修館書店,体育の授業研究,1978,170-258

上原禎弘,梅野圭史,小学校体育授業における教師の言語的相互作用に関する研究-走り幅跳び授業における品詞分析の結果を手がかりとして- .体育学研究,45(1),2000,24-38

梅野圭史,辻野昭,体育の教授技術(その2)-パターン分析からみた教師行動,体育科教育,39(14),1991,76-79

梅野圭史,中島誠,後藤幸弘,辻野昭,小学校体育科における学習成果(態度得点)に及ぼす教師行動の影響,スポーツ教育学研究,17(1),1997,15-27

高橋健夫,岡沢祥訓,中井隆司,教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業評価に及ぼす影響について,体育学研究,34,1989,191-200

高橋健夫,岡沢祥訓,中井隆司,芳本真,体育授業における教師行動に関する研究-教師行動の構造と児童の授業評価との関係-,体育学研究,36,1991,193-208

岡沢祥訓,高橋健夫,中井隆司,小学校体育授業における教師行動の類型化に関する検討.スポーツ教育学研究,10(1),1990,45-54

#### 5.主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

上原禎弘,牧山達雄,小学校体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究-バスケットボール授業における品詞分析の結果を手がかりとして-.兵庫教育大学研究紀要,査読無,第54巻,2019,95-107

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 上原禎弘 牧山達雄	4. 巻 第54巻
2. 論文標題 小学校体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究 - バスケットボール授業における品詞分析の結果を手がかりとして -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 95 - 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----